

正義と忠誠の十字路

2018年のマレーシアにおける政権交代と映画

山本 博之

はじめに

2018年5月、マレーシアの総選挙で希望連盟が国民戦線を破った。独立から61年目にして初の政権交代が実現したことや、22年間の長期政権をつとめたマハティール・モハマド元首相が野党から出馬し92歳という高齢で首相に返り咲いたことなど、この政権交代はマレーシア国外からも大きな関心が向けられた。

61年目の政権交代と92歳の首相就任という2つの話題に加えて興味深いのは、犬猿の仲といわれたマハティールとアヌアル・イブラヒムの共闘が実現したことである。アヌアルは、1990年代にマハティール首相の後継者と目されていたが、路線の対立のため1998年にマハティールによって政府と与党から追放されると、マハティールを「独裁者」と批判し、新党を結成してマハティールに挑戦した。他方マハティールは、2003年に首相の座を退いた後、「長老」の立場で与党内から後継政権を批判してきたが、2018年の総選挙では離党して新党を結成し、マハティールの政党とアヌアルの政党が希望連盟として共闘関係を結んだ。マハティールからアヌアルへの禪譲がすんなり実現するかはなお不確実な部分があるとはいえ、20年に及ぶ対立関係にあったマハティールとアヌアルが手を結んだことは大きな戸惑いなく受け入れられているようだ。

政権交代とそれに伴う変革に対する希望を込めて、マレーシアでは「新しいマレーシア」という言葉が多く見られるようになった。制度面での変革は今後取り組みが明らかになっていくだろうが、それとは別に「希望」に即して重要なのは、選挙による政権交代という共同事業を成し遂げたマレーシアの国民がどのような新しい物語を作っていくのかということである。映画はそのような物語が表れるメディアの1つである。

1. 2018年9月公開のマレーシア映画と政権交代

●『起ち上げれ 今度こそ』

2018年9月13日に劇場公開された『起ち上げれ 今度こそ』は、5月の総選挙の際の実際のエピソードを組み合わせて3人の監督が共同で制作した作品である。世界各地のマレーシア人が互いに知らない人によるリレー式で在外不在者投票をマレーシアの投票所に届けたこと。マレーシアで暮らすことに希望を見出せずにシンガポールに働きに出た華人青年が愛国心に目覚めて帰国して投票したこと。不正投票の疑いがある人物の投票を黙認しようとした選挙管理委員長をその娘である選挙監視ボランティアが批判したこと。弱みを握られたインド人男性が投票箱のすり替えによる投票の水増し工作に加担させられたこと。子どものためにこの国の将来のことを考えてと妻に言われたマレー人警官が職務と正義感のあいだで揺れ動くこと。マレーシアに対してどこか他人事のように見ていたサバ人ジャーナリストがもう一度この国に希望を見出すこと。これらのエピソードが絡みあって最後に1つにまとまるころはご都合主義という批判もあるが、総選挙から4カ月で撮影と編集を終えて公開に間に合わせた熱意を受け止めたい。

『起ち上げれ 今度こそ』の複数のエピソードのうち、選挙管理委員長である父親と選挙監視に加わった娘の話に注目したい。娘は投票所を訪れた人を見て外国人によるなりすまし投票の疑いがあると指摘するが、この男性は正規の身分証明書を持っていたために入場が認められる。娘はさらに食い下がるが、選挙管理委員長である父親によって投票所から退去するよう命じられる。その男性が実際に外国人だったのかは劇中で明らかにされないが、外国人である疑いが十分にあるような描かれ方がされている。ここで見られるのは、個別には多少の不正があろうとも秩序（現政権）を維持することが結局は社会全体のためになるとい

う論理と、たとえ秩序が一時的に崩れたとしても、どのような小さな不正でも許すべきではないとする論理の対立である。これは忠誠と正義の対立という表現で、マレーシア社会が600年前のマラッカ王国の時代から注意を払い続けてきた課題と重なっている。独立後のマレーシアでは忠誠に重きを置く傾向が強かったのに対し、選挙管理委員長の娘が父親を公然と批判して対立したことは、従来に比べれば正義の側に重きを置いていると言える。ただし、娘は選挙管理委員長によって投票所から退去させられており、正義が忠誠に勝れば問題解決とは限らないという難しさも垣間見える。

劇中では、旧マハティール政権時代である1990年代のマレーシアを知る人には懐かしい「スジャトラ・マレーシア」の歌が流れ、しかも1980年代から1990年代にかけて活躍し日本のマレーシアファンにも馴染みの深いシーラ・マジッドが歌っている。なお、原題の「ini kalilah」(今度こそ)は標準的なマレー語と語順が異なるが、サバで昔から広く使われていた言い方で、2012年頃から政権交代を目指そうというスローガンとしてサバ各地で使われるようになり、今回の総選挙では半島部マレーシアでも広く使われていた。

政権交代の熱気で作られたこの作品は例外であり、政権交代が反映された映画が作られるにはまだ少し時間がかかるかもしれない。ただし、選挙や政権交代を直接の題材にしていないものの、後付けのものを含めて、政権交代や「新しいマレーシア」を織り込もうとしたり感じさせたりする映画はすでにいくつか見られる¹⁾。

1)『ゴールと口紅2』は、バーナード・チョウリー監督の『ゴールと口紅』(2005年)の続編ではなく、別の監督による別バージョンの物語である。「女の子らしさ」を追求しつつ成功するという『ゴールと口紅』のテーマが13年後の社会状況にあわせて語り直される。インスタ有名人のヤヤとトムボイのザックがカレッジ入学で出会う。ザックには他人から高評価を得ようと必死なヤヤが子どもっぽく見えるし、ヤヤには自分の世界に入り込んで他人と付き合いが悪いザックが薄情だと思う。運悪くルームメイトになった2人は入学早々につかみ合いの大喧嘩になり、罰として協力して女子寮の世話係をするよう命じられる。女子寮では、寮生がそれぞれ個人の問題を抱えるとともに、経済的理由から寮の存続の危機に直面していた。寮の存続をめぐる意見が対立したヤヤとザックは別行動をとることにするが……。この作品は総選挙や政権交代と全く関係がないが、最後にヤヤとザックが力を合わせてファッションショーを成功させ、その日付が政権交代の日である5月9日になっており、「新しいマレーシア」の誕生を寿いでいる様子がうかがえる。なお、この作品には男子も登場するけれど完全に添え物扱い

◎『十字路』

2018年9月6日に劇場公開された『十字路』は、マレーシアで働く外国人の生きざまに目を向けるとともに、マレーシアの警察を批判的に描くもので、この作品がマレーシアの劇場で一般公開されたことに驚かされた。制作は数年前から準備されており、政権交代の記憶がまだ新しい時期に公開となったのは偶然だが、警察を公然と批判する作品が制作・公開されたことを「新しいマレーシア」と重ねて受け止めた人も多かったようだ。

マレーシアはインドネシアやフィリピンやミャンマーなどの近隣諸国からの労働力に頼っている。そのような外国人労働者のなかには正規の手続きを経てマレーシア国民になった人もいるが、マレーシアは陸路や海上から入国しやすいことから、不法入国者や不法就労者も少なくない。不法入国者や不法就労者は条件のよい職に就けず、本国政府からもマレーシア政府からも権利が守られない状況で、自分の身を守るための手段を取らざるを得ない。

この作品では、インドネシア出身でマレーシア国籍を持つサリプとアディの父子が、近隣に住む外国人労働者の庇護役を買って出る。ただし2人のやり方は異なり、サリプは警官と役人に札束を掴ませ、アディは「やられたら泣き寝入りするな」と実力行使する。他方で警官と役人は、不法外国人を取り締まる権限を与えられている限り、外国人から金銭を集めることができる。正義感に燃える若い警官フセインは、警察であれ市民であれ、どんなに小さな不正も許せない。そして外国人はみな犯罪者で、マレーシア国籍を持ってい

で、プロデューサーのリナ・タンが手掛けた作品らしさがうかがえる。

『61年目の約束』は、出稼ぎのために家を出て行った夫の行方が61年目にしてようやく判明するという実話をもとにした物語である。1940年代のマレーシア(当時はマラヤ)で、漁師のオスマンは家族の生活を良くしようと思い、妻のチェ・トムに必ず帰ってくると約束して、タンカーの乗組員になる。しかしいろいろな事情が重なってオスマンはなかなか故郷に戻ることができない。チェ・トムは海辺の簡素な家を離れようとせず、オスマンの帰りを60年も待ち続ける。チェ・トムの命の灯が消えかかっているとき、孫のアフマドがオスマンの行方を捜しあてる。華人のラムが要所要所でマレー人のオスマンを助ける役に登場する。そこで描かれているのは異民族間の友情だが、2人のふとしたやり取りは、男どうしの「友情以上、恋愛未満」の関係も匂わせている。この作品は総選挙や政権交代とはまったく関係ないが、61年目にして本来あるべき状態に戻るといふ物語が偶然にも61年目の政権交代と重なった。



『十字路』の1シーン。警察で取り調べを受けるが答えが出せないアディ (©Pixel Play Entertainment)



『十字路』の1シーン。悪徳警官を取り締まる警官役(左)で出演したプロデューサーのプロント・バラレー (©Pixel Play Entertainment)



『十字路』の1シーン。スミヤティ(右)は兄イマンの助けを借りてインドネシアに帰国しようとする (©Pixel Play Entertainment)



『十字路』の1シーン。外国人労働者の斡旋と取り締まりで儲ける黒幕はナムロン監督が演じた (©Pixel Play Entertainment)

ると言っても非合法に取得したのだろうと決めつける。帰国を望むインドネシア人女性スミヤティをめぐるアディとフセインが争いになり、アディが発砲したことで事態は悲劇に向けて大きく展開する。

アディは正義の人で、不法外国人だけでなく警察による不正も許せない。しかし、彼が不正義と考えるものを手続きに従わず実力行使で排除しようとした結果、すべての人が悲劇に見舞われる。作品の冒頭と終わりに、事件後に警察で取り調べを受けているアディの顔が映される。質問に答えられず無言で考えたままのアディの様子には、多少の不正義には目をつぶって全体の秩序を守るのが正しいのか、それともどんなに小さくても1つ1つの不正義を許すべきでなく、それを正すための実力行使による多少の犠牲はやむを得ないのか、忠誠と正義の問題にマレーシア社会も答えを出しあぐねている様子が重ねられている。

●『PASKAL：マレーシア海軍特殊部隊』

2018年9月27日に劇場公開された『PASKAL：マレーシア海軍特殊部隊』も正義と忠誠の問題を扱っている。物語の舞台は現代のマレーシアだが、マレーシ

アという国ができるずっと前から口承文学などで語り継がれ、何度も映画のテーマになってきた古典であるハン・トゥアの物語を下敷きにしている。『PASKAL：マレーシア海軍特殊部隊』は総選挙の前から制作されていたもので、選挙前のマレーシア社会の雰囲気を反映した作品と見るべきだろう。この作品を読み解くにあたり、マラッカ王国時代から語り継がれてきたハン・トゥアの物語と、それがマレーシアの映画でこれまでどのように描かれてきたかをまとめておこう。

2. ハン・トゥアの物語

●王宮文学から大衆演劇へ

ハン・トゥアはマラッカの民衆が長年語り継いできたマラッカ王国時代の英雄で、17世紀初頭に編集が完了した『スジャラ・ムラユ』(ムラユ王統記)に登場する。17世紀後半から18世紀初頭のあいだに編集された『ハン・トゥア物語』では、ハン・トゥアは語学や呪術・占術に通じ、マラッカのスルタンに忠誠を捧げる人物として描かれる。

いくつかの異なるバージョンがあるが、ハン・トゥ

アはハン・ジュバたち4人の仲間とともに武術シラットを身に着け、短剣クリスの使い手であり、マラッカの治安を守った功績によってスルタンに引き立てられ、ハン・トゥアはスルタンに忠誠を捧げる。ハン・トゥアは外交使節として中国やブルネイからイスタンブールやエジプトまで多くの地域を訪れる。

植民地時代のマラヤでは、1920年代と1930年代に人気のピークに達した大衆演劇バンサワンでハン・トゥアが最も人気のある演目の1つとなった。1947年に歴史学者でもあるイギリス人植民地官吏によって英語版の『ハン・トゥアの冒険』が出版され、スルタンに対する忠誠の物語が強調された。

マラヤでは日本軍政を経てナショナリズムが高まり、1946年にマレー人政党である統一マレー人国民組織 (UMNO) が設立された。UMNOは、党旗と党のシンボルにクリスを採用し、ハン・トゥアの決めゼリフを簡略化した「マレー人よ永遠に」をスローガンとしており、設立者のオン・ジャアファルは「現代のハン・トゥア」と呼ばれた。

後に初代首相となるアブドゥル・ラーマンは、1956年1月にロンドンでの独立交渉を終えて帰国すると、首都クアラルンプールを差し置いてマラッカを訪れ、そこでマラヤの独立計画を発表した。その翌月、映画『ハン・トゥア』が劇場公開された。マレー映画としては初のカラー映画で、ハン・トゥアを演じたP.ラムリーの代表作の1つとなり、その後もテレビで繰り返し放映され、学校でも教材とされた。

●『ハン・トゥア』

『ハン・トゥア』は英語版の『ハン・トゥアの冒険』をもとに脚本が書かれた。『スジャラ・ムラユ』ではなく『ハン・トゥア物語』の内容に近いが、大きく脚色され、ハン・トゥアが語学や呪術・占術に通じて外交使節として諸外国を訪れた側面はすっかり落とされている。あらすじは以下の通りである。

ハン・トゥアと4人の仲間が海賊を退治する。5人はレダン山で修業し、ハン・トゥアはレダン山の少女メルーと思いを寄せ合う。ハン・トゥアたちは修行を終えてマラッカに戻り、突然暴れ出した人々から宰相を守ったためにスルタンに引き立てられるが、これにより宰相たちから疎ましがられる。ハン・トゥアはスルトンの結婚に付き添ってマジヤパヒトに同行し、シ

ラットの勝負によりマジヤパヒトの勇者タミンサリを破り、タミンサリが持っていたクリスを授かり、それにタミンサリと名付ける。ハン・トゥアはスルトンの命を受けてパハンを訪れ、自分に気を持たせて王女トゥンテジャを連れ出してマラッカに連れ帰り、スルトンの第二夫人に迎える。

ハン・トゥアの不在中にメルーがマラッカにハン・トゥアを訪ね、スルトンの女官に迎えられる。ハン・トゥアはスルタンへの忠誠のためにメルーとの関係を断つことにし、それを伝えるためにメルーと会う。宰相らの企みでその現場を目撃したスルタンは、ハン・トゥアが女官と密通したと思い、ハン・トゥアの裏切りに怒ってハン・トゥアの死刑を命じる。スルタンはハン・トゥアが持っていたタミンサリをハン・ジュバに渡す。メルーはハン・トゥアの復讐を試みるが返り討ちにあって絶命する。親友ハン・トゥアが公正に裁かれずに死刑になったことに怒ったハン・ジュバは、スルタンに反逆し、王宮を占拠する。ハン・トゥアは実は殺されずに幽閉されていることを知らされたスルタンは、ハン・トゥアを呼び戻してハン・ジュバ討伐を命じる。ハン・トゥアはハン・ジュバと戦い、ハン・トゥアの手へ渡ったタミンサリで刺されたハン・ジュバはハン・トゥアに抱えられて息を引き取る。

恋人と親友を失ったハン・トゥアが「どちらが正しいのか、私か、それともハン・ジュバか」と自問して幕が閉じる。これ以降のマレーシアの演劇や映画はこの問いに答えようとしてきたと言える。

3. 映画の中のハン・トゥア

映画『ハン・トゥア』は英語版『ハン・トゥアの冒険』をもとにしており、『スジャラ・ムラユ』や『ハン・トゥア物語』と比べると多くの省略や脚色が見られ、ハン・トゥアがスルタンに忠誠であることが強調される。この映画が繰り返し上映されることで、今日に至るマレーシアの一般の国民のハン・トゥアに対するイメージを形作ったと言える。

その一方で、映画『ハン・トゥア』の最後にハン・トゥアが投げかけた「どちらが正しいのか、私か、それともハン・ジュバか」という問いは、ハン・トゥアの物語に別の側面から光を当てるきっかけを与えた。1957年の独立以降、ハン・トゥアの物語を題材にした

映画がいくつも作られ、そこではハン・トゥアとハン・ジュバのどちらが正しいのかという問いへの答えが試みられている。

各作品のあらすじの紹介は別の機会に譲ることにして、ここでは上記のハン・トゥアの問いへの応答という観点から作品ごとに見てみたい。

●『ハン・ジュバ』

1961年に公開された。1956年の映画『ハン・トゥア』をハン・ジュバの側から描いた作品で、ハン・ジュバこそ英雄であるという主張を前面に出している。スルタンの不公正に怒ったハン・ジュバがスルタンに反逆し、王宮を占拠して財物を手に入ると、自分が欲しいのは富ではなく正義なのだと言いながら財物をすべて民衆に分け与える。ハン・ジュバは社会主義的無政府主義的な英雄として描かれる。

●『愛国者の死』

1981年に政権に就いたマハティール首相のもとで開発政策が進められた時期に制作・公開された。舞台は同時代のマレーシアで、ハン・トゥアやハン・ジュバは登場しないが、会社社長の5人の息子が武術を学んでおり、ハン・トゥアたちをモデルにしている。開発か伝統かで揺れるマレー人社会で、父親が亡くなった後に5人の息子たちは互いに対立する。揉みあっているうちにハン・ジュバにあたる人物が倒れ、柱に頭を打って動かなくなるが、しばらくして息を吹き返す。ハン・ジュバの復活はハン・ジュバの考え方が支持されていることを示している。

●『トゥア』

現代のマレーシアにハン・トゥアがタイムスリップしてくる。マラッカ王国ではハン・トゥアがいなくなったためにハン・ジュバを倒せる人がいなくなり、ハン・ジュバがスルタンになっていた。ハン・トゥアは過去に戻り、ハン・ジュバと問答の末にハン・ジュバを倒す。この作品がハン・ジュバをスルタンにしたということは、ハン・ジュバの論理の正当性を部分的ながら認めていることを意味する。しかし最後にハン・ジュバが打倒されており、ハン・ジュバの行動が完全に肯定されたというわけではない。ハン・ジュバの考え方は間違っていないが、正しさを追求するやり方が

間違っていることを意味している。

●『続・XX線』

舞台は現代のマレーシア。時空を超える装置の発明によって科学者たちがマラッカ王国時代にタイムスリップして、ハン・トゥアとハン・ジュバの戦いの最中に飛び込む。科学者たちは、歴史を変えてはいけないという思いを抱きながらも、ハン・トゥアとハン・ジュバに対し、2人は敵味方として戦うのではなく力を合わせてスルタンを倒すべきだと説得を試みる。ハン・ジュバはハン・トゥアに倒され、どちらが正しいのかという問いは主題化されないが、本当に倒すべき存在が別にあるという主張には目を見張るものがある。

●『月について』

現代マレーシアの地方が舞台。4人の男の子と1人の女の子の仲よし5人組が通う小学校に女の子が転校してくる。恋に目覚めた男の子たちは転校生をめぐる夢の中で争う。ハン・トゥアになった男の子がハン・ジュバになった男の子を負かして、ハン・ジュバに囚われていた女の子を救い出し、敗れたハン・ジュバは森の奥に消えていく。やがて大人になり、夢でハン・トゥアになった男の子は救出した女の子と結婚する。そして夢でハン・ジュバになった男の子はマレーシア初の宇宙飛行士になる。物語の中で成功したのはハン・トゥアであるように見えるが、映画のタイトルからもわかるように、この作品は2007年にマレーシア初の宇宙飛行士が誕生することを強く意識して作られており、本当の成功者は宇宙飛行士になったハン・ジュバであるとの印象を与えている。ハン・トゥアに敗れたハン・ジュバは、死んでいなくなってしまうのではなく別の世界に行って活躍するというメッセージが読み取れる。

4. 『PASKAL : マレーシア海軍特殊部隊』

『PASKAL : マレーシア海軍特殊部隊』は海賊と戦う海軍特殊部隊を描いた作品だが、そこにはハン・トゥアとハン・ジュバの内容が重ねられている。

マレーシア海軍特殊部隊のアルマン・アンワル少佐は、ソマリア沖でマレーシアの原油タンカーが海賊に乗っ取られた事件で、同僚のジェブやジョシュアたち

とともに海賊を制圧して乗組員全員を無事に保護する(2011年1月に起きた実話に基づく)。その後、アンゴラのPKO活動に参加中に、地元の強盗団に襲われてジョシユアが命を落とす。怒ったジェブは投降の意を示した強盗を射殺し、それを軍規違反として処罰されたことに怒って除隊する。

帰国したアルマンは英雄として迎え入れられるが、海軍特殊部隊の作戦中に殉職した父と同じ道を辿らせたくない母は、アルマンが仕事を続けていることを快く思っていない。母の願いを聞き、さらにジョシユアの妻リリーが1人で子育てしている様子を見て、アルマンは前線を離れて事務職に異動したいと上司に申し出る。

その許可を待つ間、ある晩ジェブがアルマンを訪ねる。正義のための行動を処罰するマレーシア海軍とその母体であるマレーシア国家は腐りきっており、そこに留まる限り正しいことはできないと言い、国家への恨みのために外国の海賊の一味になったジェブは、これから自分がすることを邪魔するなとアルマンに警告する。それはサバ沖の石油プラットフォームを占拠することの予告だった。ジェブと海賊によって人質にとられた従業員にリリーが含まれており、アルマンはリリーを救うため、そして国家を守るため、再び部隊を率いて石油プラットフォームに乗り込む。

この作品は、国家と国民のために命を懸けて戦い、その貢献にかかわらず個別には十分に光を当てられていない人たちに目を向けさせるものである。それとともに、ハン・トゥアとハン・ジュバの物語を下敷きにしていることは明らかである。ジェブは、子どもが生まれたばかりで次の帰国を楽しみにしていたジョシユアが理由もなく殺されたことへの義憤から強盗に報復したのであり、ジェブなりの正義ゆえの行動だったが、国はそれを認めないどころかジェブを処罰した。同じ場にいたアルマンもジョシユアの死に対する憤りを感じただろうが、海軍に留まり、結果としてジェブを処罰した側に身を置いた。「ジェブ」(Jeb)が「ハン・ジュバ」(Hang Jebat)の省略形であることを示すまでもなく、ジェブはハン・ジュバであり、したがってアルマンはハン・トゥアである。物語の最後はジェブとアルマンの対一の対決となり、どちらも銃を置いてナイフを持って死闘を繰り広げる。その様子はハン・トゥアとハン・ジュバのクリスでの戦いを

思い出させる。

ハン・トゥアとハン・ジュバの物語を下敷きにしている以上、最後に勝つのはハン・トゥアであり、ハン・ジュバは舞台から退場することになる。ただし、ハン・ジュバがどのように退場するかが重要である。最後に勝ったのはアルマンだが、ジェブにとどめを刺さず、海中に飲み込まれたジェブの生死は不明のまま物語が幕を閉じる。物語全体では、個人の事情を差し置いて国家や国民のために身を捧げるアルマンを肯定的に評価し、自分勝手な正義を振りかざしたジェブを断罪しているが、ジェブの生死を不明にしたことは、ジェブを完全な悪者とするのではなく、その怒りに同情できる部分もあることを示している。その上で、最終的にジェブを退場させたこととあわせて考えると、無条件で政府に従うことには再考が必要だが、怒りに任せて破壊行為に出て秩序を壊すことは受け入れないというメッセージになっている。

おわりに

歴代首相が王族関係者だったのに対して初の庶民出身の首相となったマハティールは、在任中にスルタンの政治的権限を縮小しようとしてスルタンと対立し、「マハティールはハン・ジュバだ」と批判された。後にマハティールの後継者と目されていたアヌアルが政権と与党から追放されると、マハティールを批判したアヌアルは「ハン・ジュバだ」と言われた。

2018年の総選挙でマハティールとアヌアルが手を結んだことは、ハン・トゥアを死刑にしたスルタンが後にハン・トゥアを許し、ハン・トゥアがスルタンの命令に従ったエピソードを思い出させる。また、マハティールとアヌアルが手を結んで政権を倒したことは、ハン・トゥアとハン・ジュバは敵味方になって戦うのではなく協力してスルタンを倒すべきだとする『続・XX線』を思い出させる。

本稿では、マレーシア映画のうちハン・トゥアとハン・ジュバの物語であることが明示的であるものに限って紹介した。ハン・トゥアとハン・ジュバの物語を下敷きにしたり部分的に含んだりしている作品はほかにもいくつもあり、ハン・トゥアとハン・ジュバの物語は繰り返し映画の主題にされてきた。そこでは、ハン・ジュバがハン・トゥアによってどのように倒され

るかによって、ハン・トゥアとハン・ジュバのどちらが正しいのかという問いへの応答が試みられてきた。

ハン・トゥアは忠誠、ハン・ジュバは正義をそれぞれ体現している。「忠誠」とは、個別には小さな不正があったとしても全体の秩序を保つためには多少の不正もやむを得ないし、全体の秩序を保つことが結果として個別の満足も与えるという論理であるが、権威に対する無条件の忠誠は悪政を見逃すことにもなりかねない。他方、「正義」とは、個別の不正を見逃したままで全体の満足を実現することはできないとの考えのもと、個別の不正があればまずそれを正すべきであり、その結果として権威を批判し打倒することで社会全体の秩序が乱れたとしてもやむを得ないとする論理である。

この2つの論理は、どちらか一方が正しいということではなく、2つのバランスをとることが重要で、どちらかに偏りつつあるときには別の側に重きを置くことでバランスが取られてきた。独立後のマレーシアでは、民族融和と経済成長という課題を前に、忠誠の側に重きを置いた社会が作られてきた。ハン・ジュバを再評価する物語が多く見られたのはその表れである。ただし、それらの物語でもハン・ジュバを完全に正しいと扱っているわけではないことに留意すべきだろう。不正があればそれが権威であろうとも正すことを支持しながらも、そのためにどのような手段をとってもよいということではないという考え方である。ハン・トゥアとハン・ジュバは、今後も忠誠と正義のバランスが託され、さまざまな物語が作られていくことだろう。

参考文献

- 西尾寛治 1995「ムラカ王権の形成：海上民の役割の分析を中心に」『南方文化』、22: 23-43。
- Khoo, Gaik Cheng. 2005. *Reclaiming Adat: Contemporary Malaysian Film and Literature*. University of British Columbia Press.
- Shaharuddin Maaruf. 1984. *Concept of a Hero in Malay Society*. Eastern Universities Press.
- Tan Sooi Beng. 1993. *Bangsawan: A Social and Stylistic History of Popular Malay Opera*. Singapore: Oxford University Press.

映画

- 凡例：邦題 ①原題、②英題、③監督、④公開年、⑤日本での公開、⑥その他
- 『61年目の約束』 ①Pulang (帰還)、③カビール・バティア (Kabir Bhatia)、④2018年、⑤未公開、⑥Netflix。
- 『愛国者の死』 ①Matinya Seorang Patriot、②Death of a Patriot、③ラヒム・ラザリ (Rahim Razali)、④1984年、⑤マレーシア映画週間 (1990年)。
- 『ゴールと口紅』 ①Gol & Gincu、②Goal & Lipstick、③バーナード・チョウリー (Bernard Chauly)、④2005年、⑤東京国際映画祭 (2005年)。
- 『ゴールと口紅2』 ①Gol & Gincu Vol.2、②Goal & Lipstick Ver.2、③ウミ・サルワナ・オマール (Umi Salwana Omar)、④2018年、⑤未公開。
- 『十字路』 ①One Two Jaga (1、2、気をつけろ)、②Crossroads、③ナムロン (Nam Ron)、④2018年、⑤アジアフォーカス・福岡国際映画祭 (2018年)、⑥Netflixでは『それぞれの正義』。
- 『続・XX線』 ①②XX Ray II、③アジズ・オスマン (Aziz M. Osman)、④1995年、⑤未公開。
- 『起ち上がれ 今度こそ』 ①Rise: Ini Kalilah、③ニック・アミル・ムスタファ (Nik Amir Mustapha)、ソー・テオンヒン (Saw Teong Hin)、M.S. プレムナス (M. S. Prem Nath)、④2018年、⑤未公開。
- 『月について』 ①Tentang Bulan、③アフマド・イドハム (Ahmad Idham)、④2006年、⑤未公開。
- 『トゥア』 ①Tuah、③アンワルディ・ジャミル (Anwardi Jamil)、④1989年、⑤マレーシア映画週間 (1990年)。
- 『PASKAL:マレーシア海軍特殊部隊』 ①Paskal (海軍特殊部隊)、③エイドリアン・テー (Adrian Teh)、④2018年、⑤Netflix。
- 『ハン・ジュバ』 ①Hang Jebat、③フサイン・ハニフ (Hussain Haniff)、④1961年、⑤未公開。
- 『ハン・トゥア』 ①Hang Tuah、③パニ・マジュダムール (Phani Majumdar)、④1956年、⑤マレーシア映画週間 (1990年)。